報告Ⅱ

台湾佛教の現状について―五大道場を中心に―

林韻柔

（台湾東海大学東海大学歴史学系兼任助理教授、龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）

前言

2010年の台湾内政部の調査資料によれば、1999年末までに台湾国内に登記された寺廟のうち、佛教寺院は2333ヶ所で19.65％を占め、道教・民間信仰に次いで第二位であり、別の2009年の台湾地区社会変遷基本調査の資料によれば、佛教徒と自認する者は、調査を受けた者全体の19.7％を占める。台湾の総人口(約2317万)によって推計すると、約456.5万人が自ら佛教徒と認めていることになる。しかし、台湾の多くの人の信仰は混然としたものであるから、実際にはさらに多くの広い意味での佛教徒が存在するだろう。

現代の台湾佛教教団において、その規模から見れば、佛光山、慈済基金会、法鼓山、中台禅寺、霊鷲山無生道場の五団体の影響力が最も大きく、現代台湾佛教の五大名山と見なされている。寺院数の比率から見ると、五大道場及びその分院の数は全体のわずか一部分を占めるに過ぎない。他方、信徒数から言えば、かえって大多数を占める。よって、五大道場によって現代台湾佛教の状況を説明することには一定程度代表性があると言えよう。

なおかつこれら道場の発展は、ほとんどすべてメディア、科学技術、文化の力を採用し布教の手段としており、ある程度現代台湾の社会構造や観念の変遷を反映しており、このため、現代台湾社会により広汎な影響があるのだろう。

一、台湾佛教の伝承系統

（一）台湾佛教の発展の歴史

台湾佛教の歴史発展は、四段階に区分できる[1]。

①日本統治以前（-1895）
この時期には、三教（儒、佛、道）融合の性格が色濃く、福建佛教の影響を受け民俗信仰の色彩を帯び、「巖仔」と呼ばれる観音信仰が展開した。

②日本統治時代（1895-1949）：日本佛教が台湾に伝わる。
日本佛教の全八宗十四派は、台湾全島において信徒約十七万人を擁し、かなりの勢力を有する。日本統治時代は日本佛教の影響を受け、台湾佛教信仰の内実は雑駁としたものから純粋なものへと向い、道場間の繋がりも、単一から複雑なもの、多元的なものへと変化した。特に日本佛教の宗派の影響を受け、台湾本島人の佛教道場にもはっきりと宗派帰属意識が存在するようになった。
　日本から伝来した八宗・十四派は以下の通りである。

八宗：　華厳宗、天台宗、真言宗、臨済宗、曹洞宗、浄土宗、浄土真宗、日蓮宗。
十四派：華厳宗、天台宗、真言宗高野派、真言宗醍醐派、臨済宗妙心寺派、曹洞宗、浄土宗、浄土宗西山深草派、真宗本願寺派、真宗大谷派、真宗木辺派、日蓮宗、本門法華宗、顕本法華宗。

　台湾本土佛教の四大法脈、四大道場は以下の通りである。

基隆月眉山法脈（善慧が基隆霊泉寺にて開創）
台北観音山法脈（本円が台北県五股郷凌雲寺にて開創）
苗栗法雲寺法脈（覚力と弟子妙果が苗栗大湖郷法雲寺にて開創）
高雄大崗山法脈（義永と弟子永定が高雄県阿蓮郷にて開創）

③戦後から戒厳令解除前まで（1949-1987）
　1949年以後、白聖、東初、南亭、李子寛らの法師・居士が国民党政府にし

[1] 闞正宗『臺灣佛教史論』「臺灣佛教略論」頁 2-20 を参照。

たがって台湾に渡り「中国佛教会台湾事務所」を発起・設立した。戒厳令時代（1949-1986）には、江蘇・浙江の叢林の法師を中心とする中国佛教会が「新正統」佛教教団の権力の中心になり、政府の支持の下、台湾佛教の整備を進めた。数十年の伝戒活動をへて、日本式の佛寺や伝統的斎堂は漢伝佛教寺院へと転換した。

1960年代になると、多くの佛教界の有識者が民間に幼稚園から小中学校にいたるまで開設し、大学内にも奨学金を設けた。つづいて大学において佛学社を設立し、大学生をひきつけ佛教を学ぶ機会を与え、ある者は出家した。このように佛教に知識層の新たな力を加え、僧の素質を向上させ、佛教と雑多な民間信仰とを明確に区別し、佛教の社会地位を高めた。これが最初の大きな転換点である。

④戒厳令解除後（1987-）

戒厳令解除後、中国佛教会の権力と威光は急激に低下し、新興の各教派と教団が次々と出現し始めた。現代の台湾佛教は、1980年以後、五大道場と、その他の寺院を統括する中国佛教会が勢力を二分する状況にある。もちろん他にもしだいに独立し発展する教団もある。

五大道場のリーダー達は慈済会の証厳法師が台湾本土出身、霊鷲山の心道法師がミャンマーの華僑出身である以外、佛光山の星雲法師（江蘇）、法鼓山の聖厳法師（江蘇）、中台山の惟覚法師（四川）は、みな第二次大戦前後に大陸から台湾に渡った僧で、彼らの年齢は近く、師承も似ており、近代中国佛教の台湾流入後の第二世代と言えよう。彼らはみな禅宗の各派の法脈を受け継いでいると自称し、お互いに微妙な競合関係にある。

単一教団について言えば、現在、規模が最も大きく、信徒・分院が最多の道場は、佛光山（高雄市）、慈済功徳会（花蓮県）、法鼓山（新北市）、中台山中台禅寺（南投県）、霊鷲山無生道場（新北市）である。

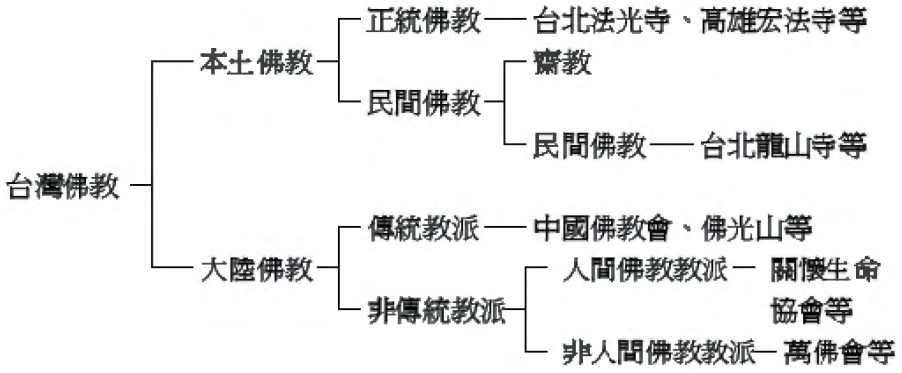
（二）現代台湾の佛教系統

ある学者は現代台湾佛教を以下の四種の勢力に分類する。

（1）白聖率いる中国佛教会。「北派」という。
（2）星雲率いる佛光山の系統。「南派」という。
（3）台湾各地に分布する寺院住職、その多くは台湾籍。
（4）佛学研究を主とする印順の系統。

中でも北派、南派と印順の系統は1949年に大陸より流伝した。しかし印順の系統が前二者と異なるのは、台湾新興佛教の思想の指導的立場となっていることである。台湾籍を主とする系統については、各地に信仰の基盤を有してはいるが、現代台湾佛教の全体的な発展に対する影響はあまり明瞭ではな

い[2]。



それ以外に、チベット佛教、日本佛教と南伝佛教も台湾において発展しているが、勢力は小さい。

二、佛教五大道場及びその他

（一）佛光山

佛光山大雄宝殿

[2] 楊惠南「解嚴後台灣新興佛教現象及其特質—以「人間佛教」為中心的一個考察—」「新興宗教研討會」，臺北：中央研究院社會研究所，2002　を参照。

本山： 高雄県佛光山
開山宗長 ：星雲法師（1927-）
宗風：
1、八宗兼弘、僧信共有。 2、集体創作、尊重包容。
3、学行弘修、民主行事。 4、六和教団、四衆平等。
5、政教世法、和而不流。 6、伝統現代、相互融和。
7、国際交流、同体共生。 8、人間佛教、佛光浄土。

分院数： 台湾74；アジア36；オセアニア13；アメリカ42。ヨーロッパ15；アフリカ8；計188。
寺院組織：
現任住持（第七任宗長）：心培和尚（慧瀚）
佛光山宗務委員会のメンバー：第七届宗委：慧伝、慈容、依空、慧寛、満謙、慧瀚、覚培、黄美華師姑、慧昭法師。

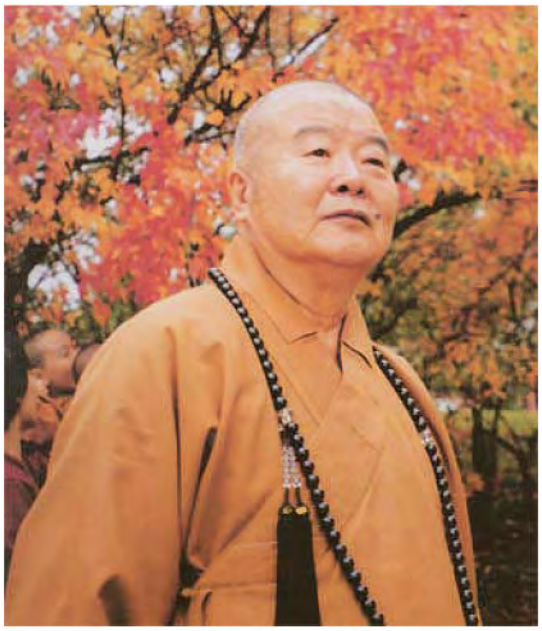
歴代住持 ：
1.星雲大師（第一、二、三任住持）
2.心平和尚（第四任住持、1995年円寂）
3.心定和尚（第五、六任住持）
4.心培和尚（第七任住持～現在）

教団事業：
1. 文化芸術：人間通訊社、人間文教基金会、人間衛視、雲水書坊、人間福報、人間佛教読書会、佛光山文教基金会、佛光山電子大蔵経、佛光文化、佛光縁美術館、世界佛教美術図典、普門学報、如是我聞、香海文化、美国佛光出版社、香海旅行社、三好体育協会、滴水坊、星雲大師公益信託基金
2. 教育事業：佛光山叢林学院、電視佛学院、天眼網路佛学院、東禅佛学院、非洲佛学院、勝鬘書院、西来大学、南華大学、佛光大学、佛光人間大学、台南人間大学、普門中学、均頭国民中小学、均一国民中小学、小天星幼稚園、慧慈幼稚園、慈航幼児園、博愛社区大学、彰化社区大学、台中市光大社区大学、苗栗大明社区大学、百万人興学、人間大学網路教学平台、南天大学
3. 慈善事業：慈悲基金会、蘭陽仁愛之家、大慈育幼院、崧鶴楼
4. 弘法事業：修持中心、禅浄法堂、浄業林、抄経堂、朝山修持活動、福慧家園

信徒組織：国際佛光会、全世界の会員約六百万人。2003年国連の正式な要請により国連経済社会理事会の非政府組織（NGO）会員となる。

佛光山は、五大道場のうち最も早くに創立した道場である上に、分院、信徒組織、事業団体も最多で最大規模の道場である。1970年代にはすでにかなり大きな道場であった。

佛光山の創始者、星雲法師は、江蘇江都の人、 1927年に生まれ、11才で出家した。1949年に軍に随って来台し、その後道場において執務を担当した。1962年高雄寿山寺に至り、寿山佛学院を創設、 1967年高雄に佛光山を開基した。



星雲法師

星雲法師は単身で台湾に来た貧困青年学僧であったにもかかわらず、現代台湾佛教最大の道場の開山宗長となったのは、主にその経歴と布教方法が、1960年代以後の台湾社会の変遷と極めて密接に関係していたことによる。幼稚園を設立し、パレードを行い、青年歌詠隊を組織し、全台湾で最初にセットになった佛教音楽レコードを録音制作するなど、伝統佛教の布教方法とはすべて異なっており、時代の風潮を反映し、信徒がすみやかに佛教を認識する手助けとなった。そのようにして、しっかりと基礎を固め、南進して高雄に至り佛光山を建立したのである。

これ以外に、星雲は教団のイメージと組織が道場の維持に重要であることをよく理解しており、このため、開基後ただちに佛光山教団の規制を作り、出家者に威儀を厳しく要求した。このほか、信徒の重要性を深く知り、制度的に信徒を組織し、佛光会を創設し、信徒の忠誠度と参与度を高め、佛光山が安定的に発展していく重要な基礎をつくった。

（二）慈済功徳会

静思精舎

本山：花蓮県静思精舎
発起人： 証厳法師（1937-）

分会数：
台湾7、アジア15、オセアニア2、アメリカ20、ヨーロッパ8、アフリカ2。合計54。
各分会の下部にはいくつかの聯絡処がある。

宗風：
「無縁大慈、同体大悲」の精神によって、会員に「佛心を以て己心と為し、師志を己が志となす」ことを要求し、遂に発展して「四大志業、八大法印」の規模となり、「慈済社会」、「慈済家庭」を建立し、「慈済人文」を推進することを目標とする。「普天の下には私が愛さない人がいない；普天の下には私が信用しない人はいない；普天の下には私が許さない人はいない。」これらによっていわゆる「佛法人間化」という理想に向かい邁進する。

会員組織：
慈済会員、慈済栄誉董事（寄付金 100万以上）聯誼会、慈友会（志工証に赤色蓮華有り）、慈済委員（志工証に青色蓮華有り）、慈誠隊員（志工証に緑色蓮華有り）慈誠懿徳会（志工証に緑色蓮花有り）、慈済教師聯誼会、慈済

人医会、慈済慈警会、慈済国際人道援助会（TIHAA）、環保志工、慈籃聯誼会、慈幼、慈少、人文真善美志工、書画家聯誼会、慈済大専青年聯誼会、外語隊

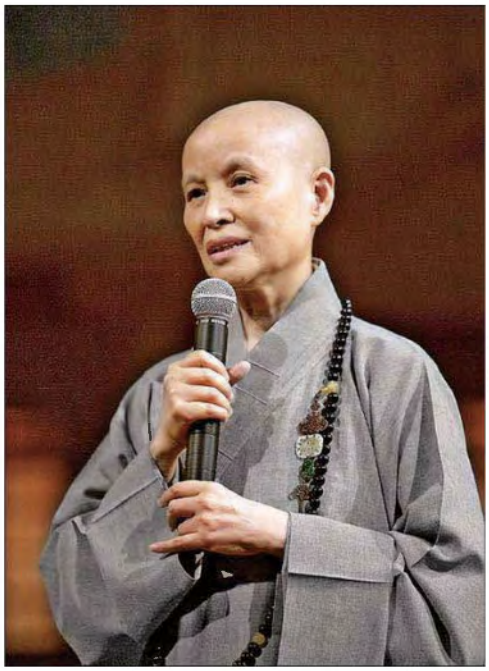
事業団体：
四大志業、八大法印：
①慈善、②医療、③教育、④人文　＋　⑤災害に対する国際的援助、⑥骨髄バンク、⑦環境保全運動、⑧地域ボランティア

1.医療：花蓮慈済医学中心、台中慈済医院、玉里慈済医院、関山慈済医院、大林慈済医院、台北慈済医院、馬来西亜洗腎中心与義診所、蘇州慈済慈善志業中心
2.教育：慈済大学、慈済技術学院、慈済大学附属高級中学（高中部、国中部、国小部、附幼）、台南市慈済高級中学（高中部、国中部、国小部）
3.人文：慈済人文志業中心、大愛電視、経典雑誌、檀施会、慈済月刊、外語期刊
4.骨髄バンク：慈済骨髄資料庫
5.環境保全運動：慈済環保教育站、大愛感恩科技公司

佛光山が僧団主宰の寺院であるのとは異なり、慈済基金会の指導者層と体制内の執事は、ほとんど全部が在家者である。証厳法師は創始者であるが、目下のところ、「精神的リーダー」の役割であり、慈済基金会と静思精舎とを厳格に区別している。慈済基金会は現在のところ、全台湾で最多の寄付を得ている社会福利団体で、慈済基金会が獲得する寄付金は、決して静思精舎の比丘尼僧団を供養するのには使用されず、静思精舎の比丘尼たちは自給自足である。慈済基金会と静思精舎との区別は、慈済基金会とその他の道場との最大の相違点である。

創立者である証厳法師は、1937年生まれで台湾本土出身である。小さい時から佛道を学ぶことに非常に関心を持っていた。25歳で自ら剃髪し、花蓮に行き修行して後、受戒前に印順法師に師礼をとり、印順の数少ない剃髪弟子となった。1966年には台湾の花蓮に「慈済基金会」を創立、当初より、慈善・貧民救済を主たる活動とした。1979年、慈済医院の建設計画が発案され施工、1986年に竣工した。現在、慈済医院の建設は、慈済基金会が日増しに興隆する里程標となっている。目下、台湾では分院は六カ所、診療所は一カ所ある。このほか、1994年には慈済医学院を建立、1998年には慈済大愛台（テレビ局）が放送を開始し、台湾佛教の布教と発展の方法に新たな道を開いた。

慈済の信徒組織においては、慈済委員と慈誠隊が慈済団体の活動推進の根幹である。当初より慈済のメンバーは女性を主として慈善活動を展開し、後には男性にも拡大した。膨大な数の会員達は、日常医療のボランティア、貧者訪問、災害援助、資源リサイクル、往生助念等の活動を行う。特に慈済医院各院内にはおしなべて多数のボランティアの協力があり、その数は一般の医療組織を遥かに超えている。無報酬で医療事務を分担する以外、患者及びその家族の心のケアを行い、その機会を利用し慈済の理念を広め、患者が病院を信頼できるようにしている。このほか、慈済が世界各地で行う災害援助活動も台湾と慈済の名声を世界に広めるものである。



証厳法師

慈済委員と慈誠隊

慈済が発展し社会に深く浸透したのは、伝統佛教の布教方式と大きく異なり、密接に時代の風潮と社会の需要に結びついたことによる。しかし注意すべきは、長期にわたり佛教教理の簡素化、実践の強調によって信者をひきつけ、成功裡に膨大な信徒を擁する佛教団体となって後、最近数年は逆に自己の法脈伝承と教理思想を打ち立て始めたことである。私はこれは単純な実践ではすでに満足できない慈済基金会の知識階層や指導者層も証厳法師の死

後、必ず信徒を持続的につなぎ止めておくことのできる根拠が必要であることを意識し、一連の行動をとったのだと考える。特に2009年佛誕日に、慈済教団は正式に「慈済宗門」を創立したと宣布し、群衆の中に入ることを修行の法門とし、人間佛教を宗旨とする新興佛教宗門を立てると宣告した。

（三）法鼓山

法鼓山大殿

本山： 新北市法鼓山
創始者： 聖厳法師（1931-2009）
宗風：
法鼓山の理念――「人の品質を高め、この世の浄土を建設する。」
法鼓山の精神――「自己を奉献し、社会の大衆を成就させる。」
法鼓山の方針――「佛陀の本懐に戻り、世界の浄化を推進する。」
法鼓山の方法――「全面教育を提唱し、全体に配慮する。」

分院数：
台湾60、アジア4、オセアニア1、アメリカ36、ヨーロッパ2。計112。
寺院組織：
僧団は1980年成立。現任の方丈は果東法師（2006-）

都監1名、副都監1名、賢首会、都監院、事務院、僧伽大学佛学院

事業団体：
僧伽大学、中華佛学研究所、法鼓人文社会学院、法鼓佛教学院、中華佛教文化館、法鼓文化、禅修推広中心（伝灯院）、佛学推広中心、法鼓山文教基金会、法鼓山佛教基金会、法鼓山社会福利慈善事業基金会、法鼓山人文奬助学術基金会、財団法人聖厳教育基金会、法鼓山大愛基金会

信徒組織：
護法総会、法青会（青年発展院）、合唱団、助念団、法行会、法青会、法縁会、般若禅坐会、教師聯誼会

法鼓山の創始者である聖厳法師（1931-2009）は江蘇南通の人。14歳で出家した。1949年、台湾に赴くため入隊従軍した。1960年に退役して後、東初法師（1907-1977）を拝し師父とし、再び出家した。聖厳法師は後に東初法師と霊源法師から曹洞宗と臨済宗の法脈を受け継いだ。1969年、聖厳法師は来日し立正大学に留学し、1975年博士学位を取得した。1977年東初法師の円寂後、その跡を継いで農禅寺の住持となり、1978年より台湾北部の農禅寺と中華佛教文化館にて多くの禅修活動を行い、アメリカにも禅修センターを設立し、知識青年層の信仰をひきつけた。1989年法鼓山が創建され、2006年果東法師に位を伝え、2009年に円寂した。
特に法鼓山は、最近十年来、おおいに社会精神の強化に力をいれており、「心六倫」、「四大環保」、「珍惜生命」等の主張を提唱し、多くの相関する活動を組織している。

聖厳法師

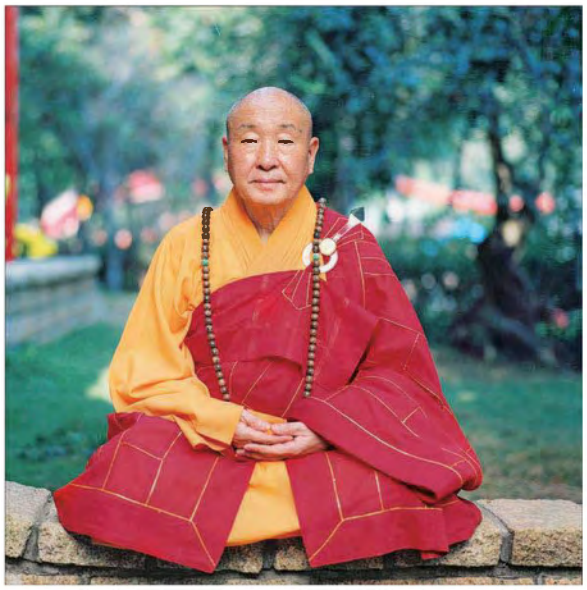
（四）中台禅寺

中台禅寺

本山　：南投県中台山中台禅寺
開山宗長：惟覚法師（1928-）
宗風：
1. 三環一体——円満な修行理念：福徳、教理、禅定
2. 中台四箴行——佛法実践の具体的準則
上に対するに敬を以てし、下に対するに慈を以てし、人に対するに和を以てし、事に対するに真を以てする
3. 佛法五化——新時代の布教方向
学術化、教育化、芸術化、科学化、生活化
分院数：台湾68、アジア4、オセアニア1、アメリカ8、ヨーロッパ1。計82。
寺院組織：
現任住持：見灯法師（1963-。2005接任住持）
中台佛教学院、普台国民中小学、普台高中、中台山博物館、財団法人中台文教基金会、財団法人中台山佛教基金会、社団法人中華民国中台禅会、社団法人中国世紀佛教協進会

中台山の開山法師は惟覚法師で、1928年生まれの四川人である。35才になりようやく台湾にて霊源法師のもとで出家した。1970年初期には、惟覚法師は主に台北県山区にて布教した。1980年代に霊泉寺を建立し、その後、中台佛教学院を創設し、各地に広く精舎を設け、広く禅修課程を開設した。1994年に至り、南投に至り中台禅寺を建立し、2001年に落成した。

1990年代初期には、中台禅寺は隆盛を極め、禅修で有名な道場として、社会経済界で極めて高い地位にある多くの知識人や企業界の人士が信徒となり、磐石な基盤を持つこととなった。しかし、1996年中台禅寺では佛学キャンプにて大学生が集団出家する事件が起こり、中台禅寺の名声に大きな打撃を与え、当時空前の盛況にあった台湾佛教界も大打撃を受けた。その集団出家事件とは、以下の通りである。1996年の夏休みに百名にものぼる中台禅寺の夏期佛学キャンプに参加した女子大学生が研習キャンプに参加後、家に帰らず、中台禅寺にて剃髪出家した。しかし寺側は故意にこの情報を隠し、さらにひどいことにこれらの女学生はすでに中台禅寺を去ったと称した。このような行為に対し当然家長たちは受けいれず、メディア報道を通じ、社会の輿論も大きな批判を加えた。



惟覚法師

実際、1980年代の発展を経て、台湾佛教は1990年に第一のピークを迎えた。各地の寺院は次々と佛学班を開設し、佛教を学ぶ意欲のある者に学習場所を提供した。この外、多くの家長は夏休み・冬休みに、子供達を寺院主催の佛学キャンプに参加させ、子供達が佛教の薫陶を受けることができることを希望したのである。台湾佛教のこの時期の布教方法は、主に教理の伝揚と教育にあり、禅修活動も相当盛んであった。しかし、父母は子供達を佛学キャンプに送るのは、決して子供達が出家することを願うからではなく、もちろん子供達が出家してよいと認めることもない。一般信徒から言えば、佛教を学ぶことと出家には相当大きな距離が存在し、出家は社会の一般大衆の想像を越えるものである。中台禅寺の集団出家事件は、社会大衆の佛教の布教目的と手段に恐れを生じさせ、一時全盛を迎えていた台湾佛教のブームは急速に冷却化したと言えよう。

この後、台湾佛教の発展方向は転換し、「人間佛教」のスローガンと各自が述べるその内容は、在俗信徒と僧団との間を連結する主流となり、社会救済、医療、社会教育、文化伝播等の活動が、社会における佛法実践の表現となった。

（五）霊鷲山無生道場

霊鷲山無生道場

本山　：新北市霊鷲山無生道場
開山宗長：心道法師（1948-）
宗風：
「生活即ち福田、仕事即ち修行」の生活禅理念に基づき信徒を教育し、「般若」の精神によって日常生活において自己澄浄なる本心を照見することを求め、間断なき精進、手放すことを習得し、心の寧静と満足を獲得させる。霊鷲山教団は禅を宗旨とし、華厳の聖山として事業を打ち立て、「三乗合一」の法教の本懐を主張する。

分院数：
台湾19、アジア4、アメリカ1。計25。
国際禅修閉関中心3

寺院組織：
世界宗教博物館、霊鷲山般若文教基金会、霊鷲山護法会、国際佛学研究中心

霊鷲山無生道場の心道法師は他と比較し一代若い世代に属する。1948年にミャンマーにて生まれ、13歳で軍に随い撤退して台湾にやって来た。1973年25歳の時、佛光山星雲法師のもと出家剃髪した。このため彼は実際、第三代

の中壮世代の法師に属する。彼は佛光山で出家はしたが、後に佛光山の僧団を離れ、独自に苦行し、禅定を修した。彼は他人と異なる修行方法によって信者の注目を受け信服され、加えて「神通」によって信徒をひきつけ、このため急速に信徒の基盤を拡大した。そして、1984年36歳の時、霊鷲山無生道場を創立した。

霊鷲山教団の急速な発展は、心道法師個人特有の修行方法と関係し、彼の行いや風気は実のところ台湾佛教の主流教団とは異なっていた。ミャンマー出身であるため、小乗の教法をも修持し、さらには蔵伝佛教をも修持し、甚だしくは密教の法王に成就者卻吉多傑(チェギ・ドルジェ　法金剛)の生まれ変わりと認められ、三乗合一を提唱した。

心道法師

霊鷲山の成立時には、他の四大道場にはすでに基盤となる信徒達がいたので、霊鷲山は独自性を打ち出すことによってこそはじめて信者を引きつけることができた。1989年に「世界宗教博物館」の建設を開始したのはその重要な象徴である。世界宗教博物館建設の提起とその完成は、霊鷲山と世間とをつなぐ架け橋となった。博物館を世に普及する過程で霊鷲山は、正式な佛教徒ではないが世界宗教博物館を支持したいと願う会員を発掘し、博物館の公共教育機能は霊鷲山の佛教教団が社会的に拡張するさらに大きな機会を与えた。霊鷲山の発展は2001年の世界宗教博物館完成時に頂点に達したことがわかる。世界宗教博物館の計画と建設によって、ある程度社会がこの新立道場を禅修を基本としつつ目を世界宗教の宗旨に向けていると認知することになり、また、佛教徒の注目と支持をひきつけることとなった。

しかし、心道法師の個人的なイメージは、戒律を厳守し、威儀を重視する台湾佛教界においては、独自の道をいくものであった。彼が早期に他人と異なり頭陀苦行を行った以外に、飲酒し言行もなりふりを飾らず、神通を重視するとして有名になった。早期に「頭には密教の帽子を被り、身には小乗の紗をはおり、足には大乗の靴を履く」と自称した以外、佛教の「三派合一」に尽力した。彼と信者達との間には比較的親密で距離がなく、これが信徒をひきつける独特な魅力となったが、しかし、このことでスキャンダルに見舞われることになった。2001年末、霊鷲山のある信者は心道法師と女性信者が男女関係にあると訴えたが、これは出家者にとって最も厳しい非難であった

と言える。この事件はもと世界宗教博物館によって威勢を振るっていた霊鷲山に大きな打撃を与え、多くの法師や信者が去り、霊鷲山の発展はこれにより停滞、さらには後退し、この後の霊鷲山の発展も限られるものとなった。

五大道場は地理分布が相当均等に分散しているが、その建立と発展はともに1980年代にあり、かつ比丘が明らかに多数を占めた。このほか、多くの分院を有していることは、各道場が台湾全領域において発展しており、なおかつ海外の華人社会にも広がっていることを示している。

総じて言えば、五大道場を観察すると、おおよそ以下の異同を指摘できる。

1、宗旨の創立と布教方法はみな意識的に佛教僧が人の為に法事を行い、経懺に赴くイメージと異なるものにしており、このため何人かの法師は開創初期にはみな苦しい経営状態にあった。しかしこのために信心が揺るぐことなく追従する信徒達を惹きつけた。

2、「禅宗」と近代江浙佛教の遺風がかなり明確に表れている。

星雲は江蘇出身で、棲霞山にて出家し、自ら臨済宗第四十八代伝承人と名乗っている。聖厳も江蘇出身で、曹洞宗と臨済宗の法脈を受け継いでいる。しかし興味深いのは、霊源の弟子の惟覚はかえって霊源法脈の伝承を受けず、このため彼は特に自らは虚雲法師の再伝の弟子であると強調した。江浙佛教の禅宗の法脈が台湾において伝承されえたのは、政治地位と権力を把握したこと以外、何人かの第二代弟子の成功も、この一法脈が伝承されることにつながっている。これ以外に、心道はもと星雲の弟子であったが、後に佛光山を離れ、頭陀禅を実践した。これは江浙派の叢林禅法とは決して同じではないが、霊鷲山の開基後、なお禅修と閉関修行を道場の特色とした。

1980年代から、法鼓山・中台禅寺・霊鷲山は、創立間もなく急速に発展したが、それらの道場は、禅修課程を開設し、打禅七などの禅修活動によって信徒の支持を獲得したのである。この時期はちょうど台湾社会経済の発展隆盛の時期にあたり、知識教育もすでに一定の水準に達し、社会の一般大衆が経済的基礎を得た後、心の拠りどころを求めるようになり、また、宗教信仰活動に参加する能力を有するようになった。知識教育の向上によって、社会の中間層が信仰を求める過程において、「利益型」の信仰方式は二度と採用されず、「修身」式の信仰方式が採用されることになった。禅修を主とする道場が興起できたのは、実に社会の変遷と切り離せない関係にあるのである。

最も早く大道場を創建し、影響力を有した星雲は臨済宗の伝承者と自認しているが、佛光山の建立当初は「八宗兼弘」を強調していた。佛光山が挙行する各信仰活動の中で特に禅修を強調しているわけではない。星雲は1970年代に布教する際、以前と異なる様々な方法を採用した。例えば、佛教歌曲の制作、合唱団を組織する、佛学講座を開設する、などである。他の頑なに旧法を守る法師と道場とは異なり、迅速かつ簡単に信徒たちに佛教の最も基礎的な教義を理解させることができたのも、彼が成功を収めることができた重

要な要因である。信徒の基礎ができた後は、自然に社会の指導者層に重視されるようになり、多くの政治家、芸能人などが彼の信者となった。このような相互補完の効果の下、星雲と佛光山は急速な発展を遂げることができ、今に至るまでなお台湾最大の佛教道場となっているのである。

3. 佛光山以外の他の四道場においても専修から兼弘への転向があった。星雲が成功できた、その個人的特質以外で最も重要な要因は、迅速かつ鋭敏に社会の変化と需要に注意し、佛光山の伝教方式を時代に沿ったものにするとともになおかつ多元化し、多くの信徒の護持を得、堅実な基盤を築いたことによる。

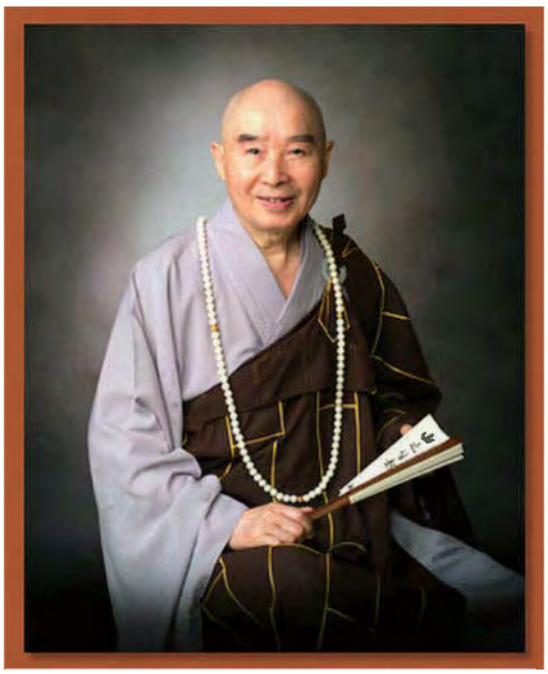
大陸の僧俗が台湾に来て後、異なる発展段階を経て、五十年間で佛教の総体的環境は顕著に変化した。佛教と社会の接触は教育・文化・慈善を主とし、佛教団体も自己宣伝に長けており、明らかに社会参加の傾向にあり、この発展の方向性が僧俗に与えた影響は甚だ大きかった。

（六）中国佛教会及びその他

中国佛教会は、1911年に中国北京にて成立した、「中華佛教総会」が原名であり、1928年「中国佛教協会」と改称し、1929年再度「中国佛教会」と改称した。1949年総部が台湾に移って後に会を再開した。

1912-1927　総会長寄禅法師（八指頭陀）
1928　太虚法師、理事長就任
1929-1938　円瑛法師、理事長就任
1938-1947　太虚法師、章嘉呼図克図、李子寛、常務委員就任
1947-1949　章嘉呼図克図、理事長就任
1949-1953　中国佛教会が台湾に移り再開準備を行う。
1952-1956　章嘉呼図克図、理事長就任
1957-1960　甘珠爾瓦、道源法師、道安法師、姜紹謨、毛凌雲が常務理事就任。
1960-1963　白聖法師、理事長就任
1963-1967　道源法師、理事長就任
1967-1974　白聖、理事長就任
1975-1978　白聖、道安、悟一法師、悟明法師、隆道法師、星雲法師、董正之、周邦道、翁茄苳ら九人を常務理事とする。
1978-1986　白聖、理事長就任
1986-1993　悟明、理事長就任
1993-2001　浄心法師、理事長就任
2001-　浄良法師、理事長就任

その他の比較的規模の大きい道場
高雄元亨寺
台南千佛山菩提寺：白雲法師（1915-2011）
生命基金会、生命電視台、佛陀教育中心：海濤法師（1958-）
高雄文殊講堂：慧律法師（1952-）
佛教弘誓学院：昭慧法師（1957-）
浄宗学会：浄空法師（1927-）


浄空法師

台湾の佛教には、五大道場以外の勢力も存在する。発展模式が五大道場と類似する道場もあれば、法師の布教が、ある程度社会の下層の佛教信者の望みや需要を反映している道場もある。例えば海濤法師、慧律法師などである。

とりわけ比較的特別な団体は、浄空法師を導師とする華蔵浄宗学会である。浄空法師は安徽出身で、他の法師と異なり、浄空法師の佛教に関する学歴は居士と比較的密接な関係にあり、なおかつ、浄土法門の宣揚を根本としている。彼は台北の臨済寺にて出家したが（1959）、主に居士に随って法を学び、台湾において頗る批判を受けた。1995年以後は、主要な布教の根拠地はシンガポールであり、その勢力は広く欧米に及んでいる。

浄空法師が提唱する修行の法門と教義に対する解釈は台湾主流の佛教とは異なっており、そのため台湾の佛教界において大いに物議をかもした。しかし浄宗学会は大量に書籍・CDを製造し、広く配布したため、浄空法師の影響はその他の法師や道場に比べ小さいとは言えない。私が中国大陸で最も早く目にした中国外の佛教結縁出版物は、浄宗学会出版の浄空法師の著作である。現代台湾佛教の浄土信仰の発展に重大な影響力を有していると言えよう。

佛教文教組織 [3]

[3]「台湾佛教史料庫」http://buddhistinformatics.ddbc.edu.tw/taiwanbuddhism/tb/を参照。

・佛学院：
千佛山女子佛学院、中台佛教学院、中華佛教学院、元亨佛学院暨佛学研究所、天台教学研究所、佛光山叢林学院、佛教力行学院暨佛教解脱道研修所、佛教弘誓学院、法光佛教文化研究所、法鼓山中華佛学研究所、法鼓山僧伽大学佛学院、法鼓佛教学院、南普陀佛学院、南華大学佛学研究中心、香光尼衆佛学院、浄律学佛院、浄覚佛学院、華厳専宗佛学研究所、開元禅学院、円光佛学研究所、円光佛学院、慈光禅学院暨慈光禅学研究所、慈明佛学研究所、寿峰山光量学佛院、福厳佛学院、台南女衆佛学院、蓮華学佛園暨華梵佛学研究所

・廃校した佛学院
法雲佛学院、華文佛教学院、蓮華山護国清涼寺浄土専宗佛学院、噶瑪噶居佛学院、福智佛学院、戒光佛学院、般若佛学院、正法佛学院、如法佛学院、佛陀学術研究院、霊山佛学院、慈善佛学院、蓮花円覚佛学院

・計画中の佛学院
法相山法相教理辯経学院

・社団組織
中国佛教会、中華民国佛教青年会、中華佛寺協会、中華佛教居士会、中華佛教護僧協会、中華慧炬佛学会、財団法人佛陀教育基金会、悲広文教基金会、僧伽医護基金会、印順文教基金会、蓮花基金会、関懐生命協会

三、現代台湾佛教の特徴

（一）新興の教派と教団の成立

戒厳令の解除(1987)にともない、新しい佛教団体が次々に成立し、思想的性格を有する新教派と新教団の出現を促した。その例としては、佛教青年会、現代佛教学会、中華佛光協会、中華佛寺協会等の社会団体が挙げられるが、おおよそ以下の三種類に分類できる：

（1）伝統的禅修を重視する教派が転型・発展したもの。
　　例：慈済功徳会、佛光山、法鼓山、中台山等。

（2）外来教派。
　　例：チベット密教、日本日蓮宗，中南半島の南伝佛教など。

（3）印順法師「人間佛教」の影響を受け台湾本土にて展開した新教派と新教団。

例：現代禅、新雨社、万仏会、維鬘仏教伝道協会等など[4]。

（二）比丘尼僧団の重要な役割

清朝の領地であった時代から日本の統治時期まで、台湾には多数の「斎姑」が存在した。彼女たちは斎教を信奉し、結婚せず菜食を行う修行者であった。1949年以後、中国佛教会が台湾に来て、戒律の伝授制度を整備すると、多くの斎姑が受戒を通して比丘尼の身分を取得し、家庭に入ることを望まず、修行を望む女性たちが、新しくかつ政府公認の身分と居場所を有することになった。

1980年代、台湾の比丘尼僧団に重要な変化が生じた：高学歴の「学士尼」が出現したのである。その原因は：

1、佛教は、彼女たちに生活の意義と事業の機会を提供し、また、佛教は伝統的な社会的地位を有しており、高学歴だが事業面における発展が制限された（同輩の男性に及ばない）女性を自然と容易にひきつけた。

2、台湾社会はかなり比丘尼の身分を尊重するので、出家女性は、男尊女卑の性差別による制限を越え、一般女性よりも多くの発言権と主導権を得ることができた。

台湾の女子大生について言うと、比丘尼の生涯はさらに一種の学生生活の延長のような機会を提供する可能性がある。最も重要なのは、出家は既婚女性と同様になること、つまり、出産育児や婚姻と有意義な仕事との間で葛藤してやまないという状況におちいることを避けることが出来るのである。現代佛教が女性の生活様式と社会身分に提供するものについて言えば、比丘尼としての生活はおそらく、台湾父系社会において、独身女性にとって最も有利な一種の社会空間なのである[5]。

世界的に見ると、台湾佛教は、僧尼の人数が大きく異なり、なおかつ尼僧の素質か高く、活動力があることで有名である。台湾佛教に比丘をはるかに

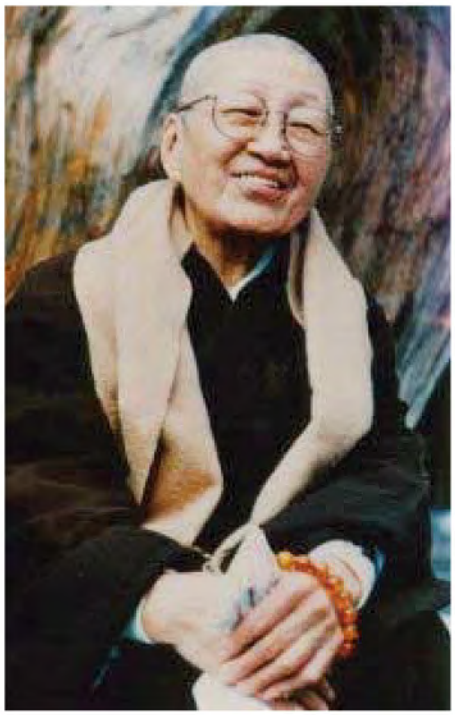
4　前掲楊恵南「解厳後台湾新興仏教現象及其特質―以「人間仏教」為中心的一個考察―」を参照。

5　李玉貞「寺院廚房裡的姉妹情：戦後台湾仏教婦女的性別意識与修行」『中央研究院民族学研究所集刊』87、1999.12 を参照。

凌ぐ人数の比丘尼が存在するというのは、おそらく漢伝佛教発展史上の空前の現象であろう。台湾の比丘尼や女性信者の人数がはるかに男性をしのぐことは、台湾の女性の地位や伝統信仰・社会変遷と密接に関係している。

星雲法師率いる佛光山は、尼僧の比率が82%にも達し、なおかつ要職に就いている。聖厳法師の農禅寺と中華佛学研究所の尼衆もまた75%に達する。証厳、暁雲、悟因法師たちは、医学・理工・佛学の各方面において、佛教大学と比丘尼僧団の成立を促進した。これら比丘尼のリーダー的特質は出家女性の台湾佛教界中における地位が日増しに高まることを代表しているだけでなく、彼女たちの社会活動力も大幅に増大しており、過去の出家女性とは大きな違いがある。

しかし人数の面で比丘の数を遥かに超えている比丘尼は現代台湾佛教の発展興隆における最も重要な支持者かつ実践者であるにもかかわらず、僧尼ともに存在する僧団においては、比丘尼は一貫して比丘を越えて僧団のリーダーあるいは後継者となるすべがないのである。このような状況は、慈済以外の四大道場においてみな見ることができる。



暁雲法師

（三）現代化した伝道事業

1、両岸と国際化交流

戒厳令解除後、台湾人民出国観光政策そして大陸の開放と緩和政策により、僧人は自由に出入国できるようになり、国外での布教や道場建立がしだいに増加した。これらのいくつかの大道場はみな海外において分院や連絡処を有しており、とりわけ佛光山と慈済の海外の道場はさらに華僑社会の活動の中心となっている。これ以外に台湾の大陸政策の軟化も両岸佛教が密接に交流する道を開いた。

2、現代社会に対する新たな参与と配慮

（1）死生学とターミナルケア

ターミナルケアと死生学（Life and Death Studies）は、ともに人の死亡と関係するが、佛教は本来生死と関係が密接である。しかし、現代化した教団は、死生学とターミナルケアについて過去とは異なる行動をとった。例えば佛光

山の系統に属する南華大学は、「生死学研究所」と「生死管理学系」を設立し、その他にも伝統教派中の浄土信仰者から組織された佛教ターミナルケア団体「佛教蓮花臨終関懐基金会」がある。

（2）環境倫理の建立と環境保護運動

戒厳令解除後、台湾佛教が開拓したもう一つの新領域は環境倫理である。台湾伝統佛教教団において、環境倫理に関心を示したのは、慈済基金会と法鼓山である。前者は「預約人間浄土（将来のこの世の浄土を約する）」を推進し、後者は「心霊環保（心の環境保護）」を提唱した。

証厳の「預約人間浄土」と聖厳の「心霊環保」はともに内在的な「心」の重視に基づいており、その範囲を拡大して外在環境の実際の汚染にまで及ぼすものである。これ以外に、その他の佛教団体が推進する環境保護、例えば、慈恩婦女会、法雲文教協会、関懐生命協会などがある。学術界においては、佛教環境倫理に関する議論も相当盛んである。

（3）女性と同性愛者の平等権運動

台湾佛教は戒厳令解除後、「衆生平等」の思想の下、時代に沿わない戒律の修訂に力を入れた。特に昭慧法師が発起人となった「廃除八敬法」運動と台湾同志(同性愛)佛教徒社団は佛教界における同性愛の地位に対して推し進められた平等権運動である。

昭慧法師

3、時代に即して進化する新しい布教の方法：電子メディア、インターネットウェブサイトの設立

戒厳令末期の佛光山と中国佛教会では、かつて台湾電視公司などの台湾テレビ局において、宗教番組を放送していた。戒厳令解除後、慈済基金会は率先して「大愛」電視台を創設し、その後、佛光山も有線の「佛光衛視」を開設した。この二つの有線電視台は、佛教番組を主としてはいるが、一般の文化教育性の番組も放送した。このほか、財力の乏しい法師たちは、共同出資して二つの有線テレビ局を設立した：「法界」と「佛（教）衛（星）」である。これらは法師の法話や、あるいは教学の番組を主としている。

戒厳令解除後の台湾佛教の電子化において最も注目に値するのはインターネットの大量の応用である。この種の佛教布教の電子媒体は、新興教派と伝

統教団ともに広く使用された。この他、いくつかの佛教のウェブサイトも次々に設立された。例えば、国立台湾大学佛学研究所学術ウェブサイト「佛学数位図書館暨博物館（CCBS）」は佛教学術研究論文目録と全文を登録することを主としているが、梵文やパーリ文の佛教研究の専門言語の教学も付されている。このほか、嘉義香光寺「香光尼衆佛学院図書館」は館蔵図書書目の検索を提供している。

佛教資源のデジタル化を推進する過程において、法鼓山は極めて重要な役割を果たしている。法鼓山は佛教典籍のデジタル化に力を注いでおり、現在漢伝佛教研究者に衆知され、広く利用されているCBETA中華電子佛典は主に法鼓山の系列の中華佛学研究所と法鼓佛教学院によって更新と維持がなされている。中華電子佛典協会では毎年新しいバージョンが出され、なおかつ無料で請求とダウンロードができる。デジタルコンテンツの重視に基づき、2006年に成立した法鼓山佛教学院はさらに研究所に「研究資訊組」を設置し、佛学デジタルアーカイブや知識管理システムに通じた人材を養成している。

もちろん、各道場のホームページのトップサイトは、信徒や社会大衆が道場を理解する重要な入口となっている。特に五大道場のウェブサイトは情報がかなり豊富であり、詳細に宗長、宗風、組織体系と活動などを紹介し、おしなべて宣伝と普及の助けとなっている。以下はその具体例である。

慈済功徳会大愛電視台、佛光山佛光衛視、法界、佛教衛星

網路光明的浄土――佛網
http://www.buddhanet.com.tw
佛学数位図書館暨博物館（DBLM）
http://buddhism.lib.ntu.edu.tw/BDLM/index.htm
玄奘西域行
http://ccbs.ntu.edu.tw/silk/index.html
香光資訊網
http://www.gaya.org.tw/library
CBETA
http://tripitaka.cbeta.org/index.php
台湾佛教史料庫
http://buddhistinformatics.ddbc.edu.tw/taiwanbuddhism/tb/
台湾佛教数位博物館
http://ccbs.ntu.edu.tw/formosa/index.html
台湾佛教網路論壇

http://tw-buddha.com/
台湾佛寺時空平台
http://buddhistinformatics.ddbc.edu.tw/taiwanbudgis/homepage/about-me.php

（四）政治、法律への参与と配慮

戒厳令の時期、台湾佛教の政治参与は、おおよそ国民党によって抱き込まれ収容改編されるという態勢を維持していた。1987年の戒厳令解除後、台湾佛教徒は「護教」の形式によって積極的に政治・法律事務に参与し、法案修正を推進した。これはもう一つの無視できない新現象である。この点で最大の成果をあげたのは昭慧法師である。

（五）知識化・学科化した佛教教育体制

戒厳令解除後、台湾佛教の改革が迅速に進んだもう一つの要因は、台湾佛教徒の学識教養が向上したことにある。大学のなかに佛学社が設けられ、出家僧が寺院において佛学院を開設しはじめた。このほか、佛教団体が主導的に世俗教育機関を創設した。現在までにすでに幼稚園、中学、職業学校、大学などがすでに存在する。これらの学校は課程に少し教団の理念が入るだけで、なお宗教が教育に関与しないという原則を遵守している。

2006年、宗教団体が単一宗教の「宗教研修学院」を設立することを台湾教育部が許可した後、本来国家に学歴資格を認められていなかった佛学院が「合法」の学歴資格を取得したことにより、台湾佛教はさらなる発展を遂げた。

印順法師

（六）各自が主張する人間佛教

現代台湾佛教界の発展を総じて見ると、印順法師が主張した「人間佛教」の影響が極めて大きいことが明確に看取できる。太虚の「人生佛教」は「『死鬼』を重んじるより『人生』を重んじよ」と主張した。一方、印順法師は、死鬼も天神にも偏らず、佛教を人と、その人が居住するこの世に佛教を置き、この世に浄土を建立することを「人間佛教」と称した。前述のいくつかの「勢力」の中で、中国佛教会と台湾本土の寺院を除けば、その他はみな印順法師の「人間佛教」と、直接或いは間接の関係にある。これにより、印順法師の思想が

現代台湾佛教改革運動において重要な地位を占めていることがわかる。しかし、各道場の「人間佛教」の内容と実践方法にはみな各自の見解と説明があり、印順法師がほとんど現代台湾佛教の思想的導師となっているとしても、この人間佛教の部分だけが強調されるにすぎない。

結語に代えて：興隆の中に存在する問題点

台湾佛教の発展の歴史から見れば、現代台湾佛教はたしかに未曽有の隆盛を迎えている。各大道場は深く社会救済や文化伝播の領域に入りこみ、現代化した媒体や方法を運用し、佛教を広く伝道している。これは台湾佛教が未曽有の成功を収めたというだけでなく、その変化と影響は、おそらく漢伝佛教の発展史上においても、一定の地位を占めるものである。

しかし、五大道場がそれぞれ内部に問題を抱えているということも、共通した現象である。五大道場の興起は、開山法師の個人的能力、性格、カリスマと極めて密接に関係しており、この状況において、開山宗長が世を去った後、道場の指導権をいかに伝承し維持していくかが最も重要な問題となっている。

五大道場において、佛光山の星雲法師、法鼓山の聖厳法師、中台禅寺の惟覚法師は高齢になるにつれ皆この継承問題を意識するようになり、既に早くに本山の住持の地位を弟子に譲っている。しかし、名目上は「創始者」「開山長老」の位を退いたとしても、三人の法師は、道場の運営と発展方向に対して決定的な影響力をなお有している。このためもあり、いわゆる継承者は、いまだ具体的にその能力を示すことができていない。これ以外に、開山法師は継承者の任命に直接的影響力を有している。このため、果たして伝承の結果がいかなるものになるかは、これら数人の開山法師の智慧を試すものとなっている。

一方、在家者主導の慈済基金会は、その継承が引き起こす衝撃はおそらくその他の道場に比べて小さいであろう。慈済基金会は長期にわたり証厳法師を精神的指導者としてきた。法師の思想は確かに慈済団体全体の発展方向に対し影響しているが、証厳法師自身は極力自身と静思精舎の法師が直接的権力を掌握することを避けており、このため、たとえ法師たちが世を去ったとしても、依然として精神的リーダーとして、その在世中の言語思想を依拠とすることができるだろう。

継承の問題を除き、現代台湾佛教にはさらにいくつかの問題が存在する。その中でも最も重大な問題は現代台湾佛教の発展が明らかに教理を単純化し、実践を重視する趨勢を示していることである。

最もよい事例は印順法師であり、彼は晩年いくつかの重要道場において大

いに尊崇され、特に慈済基金会は近年自己の法脈系譜を建てることに力を注いでいるが、その時に「人間佛教」の「玄奘」「太虚」「印順」という法脈を打ち建てることにより、印順を「慈済宗門」の祖としている。興味深いのは、印順は一生を経典研究に没頭し、佛教教理と歴史研究の研鑽に力を注いでおり、その晩年になってようやく「人間佛教」のおしえを提唱したのであり、それが各種社会救済事業を推進する思想根拠とされ、各大道場の重視と推戴を受けたのである。しかし、印順の最も重要で最も強調した学術教理思想研究は、かえってこのためにいわゆる「人間佛教」が実践を提唱し、教理を単純化する過程において消失してしまったようである。このほか、「人間佛教」の真意は一致した結論に達することはなく、各道場が自身の必要に応じて、自身の意見を加えて解釈し、台湾佛教の教義に対する認知と需要もこのために単純化された。

総じて言えば、現代台湾佛教教団の社会参加への転向は、台湾の宗教変遷の趨勢に対して具体的な影響や効果を生じ、佛教を出世間から積極的な入世(社会参加)実践へと向かわせ、過去と異なる宗教表現形式を展開することを促した。それはまた、台湾社会の階層・組織・構造の発展と緊密に結合しており、台湾のいくつかの大道場の興起と発展の過程から、台湾社会の変化をも見ることができるのである。

しかしながら、台湾佛教の発展隆盛の背後には、憂慮すべき大きな問題がある。伝承の問題のほか、人間(じんかん)化と佛教教理の単純化が、佛法の伝承にいかなる影響を与えるか、未来の台湾佛教界、ひいては漢伝佛教界全体が存続していくことができるかは、最も考慮に値する課題である。

後記：本文は現代台湾佛教の現状を紹介することを主としており、その内容は多く先人の研究成果を基礎とし、筆者の個人的観察による見解を加え作成したものであり、厳密な専門学術的論考ではない。先人の美を剽窃することになるのを恐れ、ここに記す次第である。